

日本の名作名文ハイライト

鼻

芥川龍之介

朗読 北島靖久

出所 風の本棚

<http://kazehon.seesaa.net/>

teabreak 編

鼻 芥川龍之介

●冒頭部分

禅知内供の鼻といえば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あって上唇の上から顎の下まで下っている。形は元も先も同じように太い。いわば細長い腸詰めのような物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下っているのである。

五十歳を越えた内供は、沙弥の昔から、内道場供奉の職に陞った今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで来た。もちろん表面では、今でもさほど気にならないような顔をしてすましている。これは専念に当来の浄土を渴仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが悪いと思ったからばかりではない。それよりむしろ、自分で鼻を気にしているという事を、人に知られるのが嫌だったからである。内供は日常の談話の中に、鼻という語が出て来るのを何よりも惧れていた。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。——一つは實際的に、鼻の長いのが不便だったからである。第一飯を食う時にも独りでは食えない。独りで食えば、鼻の先が鉢の中の飯へとどいてしまう。そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ座らせて、飯を食う間中、広さちよつと長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げていて貰う事にした。しかしこうして飯を食うという事は、持上げている弟子にとっても、持上げら

れている内供にとっても、決して容易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子が、嚏をした拍子に手がふるえて、鼻を粥の中へ落した話は、当時京都まで喧伝された。——けれどもこれは内供にとって、決して鼻を苦に病んだ重なる理由ではない。内供は実にこの鼻によって傷つけられる自尊心のために苦しんだのである。

池の尾の町の者は、こういう鼻をしている禅知内供のために、内供の俗でない事を仕合せだといった。あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思ったからである。中にはまた、あの鼻だから出家したのだからと批評する者さえあった。しかし内供は、自分が僧であるために、幾分でもこの鼻に煩される事が少くなったと思っていない。内供の自尊心は、妻帯というような結果的な事実には左右されるためには、余りにデリケートにできていたのである。そこで内供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の棄損を回復しようとして試みた。

第一に内供の考えたのは、この長い鼻を実際以上に短く見せる方法である。これは人のいない時に、鏡へ向って、いろいろな角度から顔を映しながら、熱心に工夫を凝らして見た。どうかすると、顔の位置を換えるだけでは、安心ができなくなって、頬杖をついたり頤の先へ指をあてがったりして、根気よく鏡を覗いて見る事もあった。しかし自分でも満足するほど、鼻が短く見えた事は、これまでにただの一度もない。時によると、苦心すればするほど、かえって長く見えるよう

な気さえした。内供は、こういう時には、鏡を箱へしまいながら、今更のようにため息をついて、不承不承にまた元の経机へ、観音経をよみに帰るのである。

それからまた内供は、絶えず人の鼻を気にしていた。池の尾の寺は、僧供講説などのしばしば行われる寺である。寺の内には、僧坊が隙なく建て続いて、湯屋では寺の僧が日毎に湯を沸かしている。従ってここへ出入する僧俗の類もはなはだ多い。内供はこういう人々の顔を根気よく物色した。一人でも自分のような鼻のある人間を見つけて、安心がしたかったからである。だから内供の眼には、紺の水干も白の帷子もはいらぬ。まして柑子色の帽子や、椎鈍の法衣などは、見慣れているだけに、有れどもなきがごとくである。内供は人を見ずに、ただ、鼻を見た。——しかし鍵鼻はあっても、内供のような鼻は一つも見当らない。その見当らない事が度重なるに従って、内供の心は次第にまた不快になった。内供が人と話しながら、思わずぶらりと下っている鼻の先をつまんで見て、年甲斐もなく顔を赤らめたのは、全くこの不快に動かされての所為である。

最後に、内供は、内典外典の中に、自分と同じような鼻のある人物を見出して、せめても幾分の心やりにしようと思つた事がある。けれども、目連や、舍利弗の鼻が長かつたとは、どの经文にも書いてない。もちろん竜樹や馬鳴も、人並の鼻を備えた菩薩である。内供は、

震旦の話のついでに蜀漢の劉玄徳の耳が長かったという事を聞いた時に、それが鼻だったら、どのくらい自分は心細くなるだろうと思つた。

内供がこういう消極的な苦心をしながらも、一方ではまた、積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざここにいうまでもない。内供はこの方面でもほとんどできるだけの事をした。烏瓜を煎じて飲んで見た事もある。鼠の尿を鼻へなすって見た事もある。しかし何をどうしても、鼻は依然として、五六寸の長さをぶらりと唇の上にはぶら下げているではないか。